マルクス主義の人間行為学的解釈

越　後　和　典

はしがき

最初に拙稿の表題と執筆の動機を説明しておく。マルクス主義[1)]に関する文献ないし研究業績は，他の社会科学や哲学等の学派のそれに比して，質量ともに断然突出しており，多くの思想家や社会科学者，とりわけ経済学者によって，マルクス主義の教義や命題があらゆる視角から研究されてきた。このような状況下で，マルクス主義の研究の前進に貢献できるような論文を，この分野の専門家でもない筆者が執筆できるはずはないし，また筆者には，そのような愚かで僭越な意図もない。

拙稿が提示しようとするのは，マルクス主義の若干の命題に関する新オーストリア学派，とりわけミーゼス（Ludwig von Mises）の解釈である。それは筆者が過去数十年にわたり従事してきた新オーストリア学派研究の副産物に属する。

ミーゼスは経済学研究の方法論的基礎として，人間行為学（*praxeology*）と称する卓越した理論を完成した[2)]。その具体的内容については，筆者がすでに十数年以前に不十分ながら，「経済学の人間行為学的方法」と題する『彦根論叢』所収の拙論[3)]で発表しているので，ここでは重複を避けその解説を省略する。

さて，人間行為学といったミーゼス特有の理論を，マルクス主義者ないしマルクス経済学の研究者が，どの程度，どのように理解しているかの情報を，筆

1）マルクス主義の何たるかを知れば，マルクス主義の研究は完了したといえよう。本稿でマルクス主義とは，ミーゼスの考えたそれを指し，内容は行論のうちに明らかとなろう
2）〔1〕参照
3）〔2〕参照。本論文は拙著：新オーストリア学派の思想と理論。ミネルヴァ書房，2003に収録した

者は全く入手していないが，ただ筆者の経験に基く推測では，ミーゼス理論を深く研究している者は，さして多くないように思う。もしこの推測が的を射ているとすれば，拙稿でミーゼス的なマルクス主義理解の一例を示すことは，必ずしも無意味とも，徒労に帰す愚行ともいえないであろう。拙稿執筆の動機はこの管見による。

とはいえ，筆者の上述の推測に過誤なしとは断じ難いし，筆者のミーゼス理解に思わざる欠陥の存在することも危惧される。識者や先学の宥恕と教示を請う次第である。

Ⅰ　物質的生産諸力の概念

マルクスの弁証法的唯物論の展開において，物質的生産諸力（*materielle Produktionskräfte*）が一つの核心的な概念であることを否定する者は少ないと思う。彼は『経済学批判[4)]』の序言において，以下のように論じている。

「人間は，その生活の社会的生産において，一定の必然的な，かれらの意志から独立した諸関係を，つまりかれらの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係をとりむすぶ。この生産諸関係の総体は社会の経済的機構を形づくっており，これが現実の土台となって，その上に，法律的，政治的上部構造がそびえたち，また，一定の社会的意識諸形態は，この現実の土台に対応している。物質的生活の生産様式は，社会的，政治的，精神的生活諸過程一般を制約する。人間の意識がその存在を規定するのではなくて，逆に，人間の社会的存在がその意識を規定するのである。社会の物質的生産諸力は，その発展がある段階にたっすると，いままでそれがそのなかで動いてきた既存の生産諸関係，あるいはその法的表現にすぎない所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は，生産諸力の発展諸形態からその桎梏へと一変する。このとき社会革命の時期がはじまるのである。経済的基礎の変化[5)]につれて，巨大な上部構造全体が，徐々にせよ急激にせよ，くつがえる[5)]。このような諸変革[5)]を考察するさいには，経済的な生産諸条件におこった物質的な，自然科学的な正確さで確認できる変革[5)]と，人間がこの衝突を意識し，それと決戦する場となる法律，政治，宗教，芸術[6)]，または哲学の諸形態，つづめていえばイデオロギーの諸形態とをつねに区別しなければならない。ある個人を判断するのに，かれが自分自身をどう考えて

4）〔3〕参照
5）*umwälzen, Umwälzung* は英語の *revolution* を意味する。〔6〕P. 107参照
6）*Kunst* は詩・小説・演劇論のすべての分野を含む。〔6〕同上参照

いるかということにはたよれないのと同様，このような変革の時期を，その時代の意識から判断することはできないのであって，むしろ，この意識を，物質的生活の諸矛盾，社会的生産諸力と社会的生産諸関係との間に現存する衝突から説明しなければならないのである。一つの社会構成は，すべての生産諸力がそのなかではもう発展の余地がないほどに発展しないうちは崩壊することはけっしてなく，また新しいより高度な生産諸関係は，その物質的な存在諸条件が古い社会の胎内で孵化しおわるまでは，古いものにとってかわることはけっしてない。だから人間が立ちむかうのはいつも自分が解決できる課題だけである……」[7]。

以上の有名なマルクスの弁証法的唯物論の公式化ないし教義（*Doktrin*）において，最も注目すべきことは，物質的生産諸力という基本概念に対する定義が与えられていないことである。われわれは，マルクス主義の研究者やマルクス自身が他の著作物において掲げた事例的説明から，彼が考えていた物質的生産諸力の意味を推測するほかない。

因みに『資本論辞典』[8]の解説によれば，「一社会における生産は，その社会に存在する利用可能な労働力と生産手段とによって行われる。この二つの〈生産要素〉の総体はその社会の物質的生産諸力をなす。二つの要素は…（筆者省略）…互に対応するものとして，…（筆者省略）…歴史的に形成された統一をなすものとして一社会の生産力をなすのである。」「物質的生産諸力の歴史的発展度を最も明瞭に表示するものは，特に〈労働手段〉である。」[9]

次に労働手段とは，上記辞典の説明によれば，要するに，「人間が自分と労働対象とのあいだにおいて，この対象に対する彼の活動の伝導体として役立たしめるような一つの物または諸物の一複合体である」[10]，と述べている。この解説で注目されるのは，物質的生産諸力を規定するに当り，労働手段という物質を重視している点である。

労働手段という物質とは，具体的には，道具や機械を意味し，したがって物質的生産諸力の発展とは，道具や機械の技術的性能の改善・進歩ないし革新的

7）〔3〕PP. 13-14（岩波文庫訳）
8）〔4〕参照
9）〔4〕同上 P. 391
10）〔4〕同上 P. 452

機械の出現を意味すると考えるのが当然であろう。

マルクス自身は，その著書『哲学の貧困[11]』で物質的生産諸力の次のような歴史的事例を示している。「手挽臼（ウス）は封建君主の存在する社会を生み，蒸気臼は産業資本家の見出される社会を生ぜしめるであろう[12]」と。

マルクスは，道具や機械の性能が物質的生産諸力の根本的な形と考え，それが生産諸関係とそれによる全上部構造を窮極的に決定すること，物質的生産諸力と生産諸関係の衝突が人類の歴史を転換させると考えたと解釈することに誤りなければ，叙上の『経済学批判』の序言に示されたマルクスの根本命題は，以下のようなミーゼスの批判に晒されることになるであろう[13]。

第一に，道具や機械そのものは物質的と呼ばれうるであろうが，それらを発明し創造するのは精神であるから，道具や機械は精神過程の産物，つまり上部構造の産物である。

第二に，道具や機械の発明や改善には技術上の知識や計画に加えて，貯蓄により蓄積された資本が必要とされる。それには貯蓄し投資することの可能な社会構造，換言すれば生産諸関係が前提となる。この意味で，生産諸関係は物質的生産諸力の産物ではなく，逆に物質的生産諸力出現の不可欠の条件である。

マルクスはもちろん，資本蓄積が工場制手工業成立の歴史的条件であることを，上述の『哲学の貧困』で認めている[14]。また周知の『資本論[15]』では資本蓄積の歴史を論じているが，史的唯物論の根本命題にかかわる物質的生産諸力の概念規定はなされておらず，道具や機械はあたかも自生的な発生物（*spontaneous generation*）であるかのように取扱われている[16]。

第三に，機械の使用は分業の下での社会的協働である。すなわち人と人との社会的結合である。いかなる機械も分業が存在しない段階では製作されないし，

11）〔５〕参照
12）同上〔５〕P. 117（岩波文庫訳）
13）〔６〕PP. 109–111
14）前出〔５〕P. 152（岩波文庫訳）
15）〔７〕参照
16）前出〔６〕P. 111

使用もされない。

しかしマルクスは次のようにプルードン（Pierre Joseph Proudhon）を批判している。すなわちプルードンが「分業一般から始めて次いで特殊な生産用具たる機械に説き及ばんと欲することは，頭から歴史を無視することである。機械がもはやひとつの経済的範疇でないのは，鋤を曳く手がそうでないのと異らない。機械はひとつの生産力にすぎない。しかし機械の応用に基礎をおく近代的工場はひとつの社会的生産関係であり，ひとつの経済的範疇である[17]」。つまり，プルードンは生産関係から説き始め生産力に及ぶという逆立をしている，と批判されている。

以上のマルクスの強情なドグマをミーゼスは次のように要約する。マルクス説では，最初に物質的生産諸力，すなわち人間の生産的努力の成果としての道具と機械がある。この起源に関する疑問は許されない。マルクス説では，それらはあたかも天から降って来たとでも仮定せねばならない。この物質的生産諸力は，人間をして彼の意志とは独立している一定の生産関係にはいらせる。この生産関係は，さらに社会の法律的・政治的上部構造を決定する。宗教的・芸術的および哲学的観念もまた然りである[18]，と。

ミーゼスの批判はさらに以下のような形でも展開されている。生産は理性の着想に従って与件を改変することである。人間は理性によって生産し，目標を選び，その達成のための手段を用いる。マルクス主義者の唯物論的形而上学は，このことを全く誤解している。「生産力」は物質ではない。生産は精神的・知的・イデオロギー的現象である。それは人間が理性に導かれて，不安を取除くために用いる最善の方法である。昔に生きていたわれわれの先祖の状態とわれわれとの違いは物質的なものではなく，精神的なものである。物質的変化は精神的変化の結果である[19]，と。

17）前出〔5〕PP. 147–148（岩波文庫訳）
18）前出〔6〕PP. 111–112
19）前出〔1〕P. 164（村田訳）

Ⅱ　階級と階級闘争

マルクスとエンゲルスは，『共産党宣言』[20]第一章「ブルジョアとプロレタリア」[21]の冒頭で次のように断言する。「今日まであらゆる社会の歴史は，階級闘争の歴史である」[22]と。

およそいかなる歴史哲学も，個人をして人類の目指す社会へ向わしめる方法とメカニズムを明示せねばならない。マルクス主義体系における階級概念と階級闘争の教義は，この問題に答えることを企図したものであろう。以下ではミーゼスが指摘し解釈したマルクス主義の階級論と階級闘争論の欠陥について，その主要な点を明確にしたい。

ミーゼスはまず第一に，叙上のマルクス説の固有の弱点として，それが諸階級を取扱い諸個人を取扱わないことであるという。このため，なぜその個人の属する階級利益がその人間の個人的利益に優先し，両者の間に衝突が生じないのかとか，いかにして個人は彼の純粋の階級意識の何たるかを学ぶのか，といった疑問が発生する[23]。

実はマルクス自身も諸個人の利益とその個人の属する階級利益の間に衝突が存在することを認めている箇所がある。たとえば『共産党宣言』の中で，「プロレタリアは階級へ，したがってまた政党へ組織されるが，それは労働者自身のあいだの競争によって，常に破壊される」[24]という。ただし組織破壊は復活するとことわってはいる。

ミーゼスは労働組合賃金率で雇用された労働者と，労働需給が適当な価格で一致するのを組合賃金率の強制が妨げるため，失業状態を続けている労働者と

20）〔８〕参照

21）エンゲルスは，1888年の英語版で「ブルジョア階級とは，近代的資本家階級，すなわち社会的生産の諸手段の所有者で賃金労働者の雇用者である階級を意味する。プロレタリア階級とは，自分自身の生産手段をもたないので，生きるためには自分の労働力を売ることを強いられる近代賃金労働者の階級を意味する」と註記している。〔８〕P.38（岩波文庫訳）

22）同上〔８〕P.38（岩波文庫訳）

23）前出〔６〕P.112

24）前出〔８〕P.52（岩波文庫訳）

の間では，調停不可能な対立があるのを否定できないという。[25)]

マルクスは階級意識をもち，個人的関心事よりも階級の関心事を優先させるプロレタリアと，そうでないプロレタリアを区別し，マルクス主義の運動目標のひとつは，自主的に階級意識をもたないプロレタリアを，階級意識に目覚めさせることにあると考えたようである。[26)] この場合，マルクスは身分（*Kaste*）と階級（*Klasse*）を混同することによって，問題を混乱させたといってよい。

身分制社会では特定の身分のメンバーは，ひとつの共通した利害関係を有する。たとえばすべての奴隷は隷属を破棄されることについて一致した利益を有する。ごく稀な例外的ケースにおいてのみ，幸運が個人をより高い身分に引上げるが，圧倒的多数の個人にとっては，出生がその人の生涯の身分を決定する。つまり奴隷の子は生涯を通じて奴隷の身分に甘んじなければならない。この身分制社会では，奴隷と領主ないし奴隷所有者の間の利害が鋭く対立するのは当然である。

しかしすべての市民が法の前で平等である市民社会では，そのような対立はない。資本主義社会でのマルクスのいう階級を，身分制社会の身分と同一視することは誤りである。マルクスのいう資本主義社会の階級の構成員は固定的ではなく，浮動しており，マルクスのいうある階級の構成員たることは，奴隷のように生得的ではない。富める者は貧しき者へ，貧しき者は富める者になりうる。富める者とその相続人は，すでに富を入手している者や野心的な新規参入者との不断の競争にさらされている。干渉主義によって汚染されていない市場経済の下では，いかなる特権も存在せず，いかなる階層への接近・加入も個人の自由である。それぞれの階層の構成員は相互に競争し合っており，共通の階級利益といったものによって結ばれているわけではない。

しかしマルクス主義者は，法の前の平等という自由な秩序の下で資本主義が機能している事実を否定する。彼等は生産手段の所有が資本家へ移ることは，特権が実質的にはかつての封建的貴族たる支配者から，資本家へ移行したこと

25）前出〔1〕P. 103（村田訳）
26）前出〔6〕P. 113

であると考える。彼等のいうには「ブルジョア革命」は，ブルジョアの特権と大衆に対する差別を廃止しなかった。古い支配者たる搾取的貴族階級に新しい支配的・搾取的階級たるブルジョアが，たんに取って替っただけである。搾取される階級すなわちプロレタリアは，「ブルジョア革命」によって，利益を得なかった。彼等は仕えるべき主人を替えただけであって，依然として抑圧され，搾取され続けた。彼等にとって必要なことは，新しい最終的な革命であり，これによってのみ生産手段の私的所有が廃絶され，階級なき社会が出現するという。

このマルクス主義の主張は，身分制社会における身分と資本主義社会における貧富の差はあるが，しかし浮動的な階層を同一視している証左である。[27] 封建制社会の領主や貴族の財産は征服によってか，被征服者側からの寄贈によって獲得したものであるから，その財産の所有者は市場に依存していない。しかし市場経済下の資本家や企業者は，その生産した財を，市場を通じて消費者・ユーザーに引渡すことによって財産を入手する。つまり消費者・ユーザーの需めに，可能な最良の方法でサービスすることにより，財産を入手し増大させうるのである。

マルクスはこうした市場経済の機能とその特徴の叙述に対して，反論を加えるといった愚かで希望の持てない仕事には決して手を出さなかった。その代り彼は資本主義発展の内在的法則によって，一方ではますます減少する少数の所有者への富の集中と，他方では尨大な数の賃金労働者の累増的な窮乏化が進展し，やがて革命により資本主義の崩壊と社会主義の出現が不可避となることを示そうとした。[28] しかしこの試みは成功していない。

第一に，資本主義国における賃金労働者，すなわちマルクスのいうプロレタリアの生活水準は，『共産党宣言』および『資本論』第一巻の刊行以降，過去に例を見ないほど改善・向上した。賃金労働者の生活をますます快適にする各種の技術革新の採用に対して，彼等がかつて機械打ちこわし等の様々な妨害活

27）同上〔6〕PP. 115-116参照
28）前出〔7〕Erster Bd. S. 802-3

動を行った事例があるにもかかわらず，「資本主義は豊穣の角を多数の賃金労働者に注いだ[29]」というのが歴史の真相である。

第二に，プロレタリアの窮乏化説の系論はその構成員が減少し続けるブルジョア階級の手中への富の集中にほかならないが，ブルジョアとは利害を同じくする人々から形成されている同質の階級であると見るのは，誤りである。同じブルジョアでも能力・力量に個人差があることはもちろんのこと，一部門・一企業にとって有利な環境や政策は，他部門・他企業にとって不利であるかもしれない[30]。

さらに，事業規模の巨大化は少数者への富の集中を必ずしも意味しない。巨大な事業体は概ね法人組織（会社）であり，それらの規模は余りにも大きく，単一個人がその資産のすべてを所有できない。事業単位の成長は個人的な富の成長を抜き，会社の規模が拡大すればするほど，多くの場合その株式（持分）はより広範囲に分散される。

資本主義は，基本的には大衆のニーズを充たすための大量生産方式を特徴とするが，この大量生産方式の主たる担い手は大企業で，その生産物の主たる消費者は賃金労働者である。巨大企業は賃金労働者のニーズをよりよく充たすための競争に打克つことによってのみ，その規模を拡大しえたのである。

第三に，社会主義を実現させる不可欠のエンジンは，プロレタリアの団結による資本主義体制への反乱であるが，上述のように，労働者間には対立が存在し，彼等が必ずしも団結しているとはいえず，しかも最も重要な事実は，資本主義の進展が賃金労働者を窮乏化させず，逆にその生活水準を改善したという点である。

このような事態の進展の下で，果して労働者は不可避的に資本主義体制への反乱へと駆りたてられるであろうか。さらに労働者の反乱の発生をかりに認めるとしても，何故にその反乱が社会主義の確立を目指さねばならないのであろうか。おそらくプロレタリアをして社会主義の成立へと導く唯一の動機は，資

29）前出〔1〕P.625（村田訳）
30）同上〔1〕P.104（村田訳）

本主義より社会主義の方が，プロレタリアにとって遥に望ましいという信念であろう。

しかし，マルクス主義者は，社会主義共和国の経済問題を取扱うのに甚だ不熱心であり，この体制が資本主義に優越する所以を明示していない[31]。その代り，ヘーゲルの弁証法を装飾的役割として利用したマルクスは[32]，ヘーゲルの楽観主義に依拠して，社会主義は資本主義の後の段階であるから，それが前段階よりもすぐれていることは自明の理であるとし，社会主義のメリットを疑うことは，これを冒瀆するものであると断じた。

かくて，マルクスの資本主義の終焉と社会主義の到来には，「自然過程の不可避性」があるという主張は，ミーゼスの評するように修辞上のトリックにすぎない[33]，といわねばならない。

Ⅲ　搾取の概念

筆者は前節で資本主義の進展に伴い賃金労働者が窮乏化すると論じるマルクス説を，歴史的事実に反するが故に誤りであると述べたが，その誤りの理論的根拠を明示しなかった。本説では人間行為学的理論に依拠しつつ窮乏化説の理論的誤謬につき検討する。

プロレタリアが窮乏化するどころか，反対にその生活水準を向上させてきたことは，理論的には労働者に対する搾取（*Exploitation*）そのものが存在しなかったと考えるほかない。

マルクスは資本主義の搾取的性格を次のように主張する。たとえば，労働者は三日間で生産されうる消費財の生産量に相当する賃金を支払われるが，実際には五日間労働し，報酬として労働者が受取ったものを超過する消費財を生産したとせよ。この場合，二日間の特別の日数の生産量の価値，すなわち剰余価値が資本家に略奪（*Appropriation*）されることになる。これが搾取なのだ[34]，と。

31）前出〔６〕P. 120
32）同上〔６〕P. 106
33）〔９〕P. 76（村田訳）

この議論は資本家から労働者へ支払われた要素価格，とくに賃金が，労働者による産出量の価格よりも低いという観察に依存している。

それでは，労働者が一見して明らかと思われる自己にとって不利益な資本家との取引に同意したのは何故であろうか。その理由は以下の通りであろう。労働者の受取った賃金が現在財に相当するのに対し，彼の行った労働サービスは，将来財に相当するものであり，それは将来，彼の行った労働サービスにかかる生産物を市場に出し，はじめてその価値を実現できるものである。労働者は現在財を将来財よりもより高く評価するがゆえに，この取引に同意したのである。労働者が労働サービスを売るのは，彼が現在はより少ない量の消費財を，将来おそらく可能と思われるより多い量の消費財よりも，選好したことを顕示したものといえる。

他方資本家が労働者と契約するのは，労働者と逆の選好秩序をもち，より少ない現在財よりもより多い将来財の方をより高くランク付けるからである。つまり資本家は賃金を労働者に前貸しして，市場のリスクを見込んだ上で，将来財の販売に賭ける方を選んだことになる。このように考えるならば，労資の利害関係は敵対的ではなく，調和的であり，資本家的賃金制度がなければ，労資ともその立場は不利となろう。[35)]

マルクスの搾取説の決定的な誤りは，マルクスが人間行為の普遍的一般的な範疇としての時間選好の現象を全く理解せず，現在財を将来財と交換するには，割引きという行為が不可欠であることを無視した点にあるといわねばならない。

ここで筆者は，ベーム＝バヴェルク（Böhm-Bawerk）などのオーストリアンの伝統的な学説に依據しつつ完成したミーゼスの時間選好説について，その要点のみを簡潔に述べておきたい。ミーゼスのいうには，人間は意識的に行為する動物（*homo　agens*）である。行為するとは目的を選択し，目的達成に合目的

34）〔10〕P. 95参照。ここでホッペは前出〔7〕および〔13〕の叙述を引用しているが，それらの紹介は省略する

35）前出〔10〕PP. 96–98参照

的な手段を選択することであるが，このような行為がなされるのは，人間の利用できる財には稀少性があるからである。このことを前提として時間選好を考えると，以下の通りである。

（1）

㈠財に稀少性があることは，人はより多量の財を，より少量の財よりも選好すること，すなわち人は投入単位当り最大の産出量を生む生産方法を選好することを意味する。

㈡財の入手にはその目的を達成するための行為を必要とするが，行為には時間が必要である。時間が必要であることは，行為には消費が必要であり，時間に稀少性があることを意味する。このことは，現在財が将来財よりも，より高く評価されることを意味する。

㈢もし㈠のみであれば，ロビンソン・クールソーは，魚を手づかみでとるよりも，漁網をつくり，さらには，漁船を建造して魚をとろうとするであろう。そうしないのは，㈠を㈡の制約下で行わざるをえないからである。㈠を㈡の制約下でどのように行うかは，その人の時間選好率によって決まる。[36)]

（2）それでは時間選好率はどのような要因によって決定されるのか。

㈠すべての人の時間選好率は個人によっても，時点によっても異なるが，正の値を示し，その高さは，現在財を将来財と交換する割引率であるから，貯蓄と投資の量によって決まる。全個人の時間選好率，すなわち社会的時間選好率を反映するのは市場利子率である。

㈡市場利子率は社会的貯蓄，換言すれば，将来財に対して交換のために提供される現在財の供給と，社会的投資，換言すれば，将来収益を生みうる現在財に対する需要とを均衡化させるものである。

㈢先行する貯蓄，すなわち現在財の可能な消費の抑制なしには，貸付けうる資金の供給は存在しえない。また現在財を生産的に使用する機会，換言すれば，現在の産出量を上廻る将来の産出量を生み出すために，さらなる投資をする必要を知らないならば，さらなる資金に対する需要は存在しない。

36）時間選好率については，前出〔10〕のほか，〔1〕も参照した

そこでは，すべての現在財が消費され，時間を要する生産過程への投資もなされえないのであるから，利子率も時間選好率も存在しないであろう。あるいはむしろ，それらは無限に上昇するといってよい。その結果，エデンの園の外なる現実の世界に住む人間の生活条件は，劇的に低下し，原始人的な生存水準で生計をたてることを余儀なくされるであろう。

㈡社会的時間選好率，市場利子率が低いほど資本形成と蓄積がより早く進展・継続し，それが生産の迂回構造の延長，労働の限界生産性の上昇，雇用の増大および，賃金率の上昇等を可能にし，資本と土地所有者，および労働の提供者の実質的所得を高め，社会を繁栄に導くのである。[37)]

最後にミーゼスと，その後継者たるロスバード（M.N.Rothbard）の高弟ともいうべきホッペ（Hans-Hermann Hoppe）が，労働と失業をどのように解釈しているかを述べ参考に供したい。

ミーゼスによれば，妨害されない市場での失業は常に自発的である。働きたい人がすべて仕事につける賃金率が，すべての種類の労働に常に存在する。それを最終賃金率と呼ぶならば，その高さはそれぞれの種類の仕事の限界生産力によって決定されるという。[38)]

ホッペはケインズ（J.M.Keynes）批判に関説して，ミーゼスの『ヒューマン・アクション』を参照し，妨害されない市場での失業は自発的であり，失業とは自己雇用の別名と断じ，人が労働するケースと労働しないケースを以下のように分類する。[39)]（１）労働から期待される満足の増加分が，余暇の享受から得られる効用（心理的収入）を上廻るとき人は労働する。（２）余暇の享受から得られる効用と労働の負の効用が労働から期待される満足の増加分を上廻るとき，人は労働することを止める。

労働者は常に自己の自発的意志にもとづき，いわゆる資本家の下で就労する自由人であって，強制的に搾取されることを余儀なくされている奴隷でないこ

37）前出〔10〕PP. 116-118
38）前出〔１〕P. 610（村田訳）
39）前出〔10〕P. 112, 労働の負の効用（*disutility*）とは，*toil and trouble* を意味すると考える

とを銘記すべきであろう。

Ⅳ　認識論とイデオロギー

ミーゼスのいうように，認識論は知識の理論であって，人間は物事を知ることができるか，どうすればできるか，どれだけできるか，それがどこまで妥当性をもつか等を研究することを課題としている。[40)]

この課題の遂行に当って，大昔から人間は考えるにしても，行為するにしても，人間精神の論理的構造の一様性と不変性を疑問の余地のない事実を考え，すべての科学的探究をこの前提にもとづいて行ってきた。ところが経済学の認識論的論議において，この前提を拒否する学派や論者が現れた。歴史学派・人種多元論者・非合理主義者等の多元論者がこれである。マルクス主義もこの多元論の典型であって，人間の思考はその属する階級によって相違すると主張する。[41)]

マルクス主義では，あらゆる社会階級はそれ自身の論理をもっている。思考の産物は思考者の利己的階級利益の「イデオロギー的擬装」以外の何物でもない。哲学と科学理論の仮面をはいで，その「イデオロギー的」空虚さを暴露することは，「知識社会学」の任務である。経済学は「ブルジョア的」間に合わせ，経済学者は資本の「侍僕」である。社会主義の階級なき社会のみが，真実を以って「イデオロギー的」虚偽に代えるであろう，と論じる。[42)]

このマルクス説を敷衍すると，人間の理性はその構造から見て，真理を発見するのに適していない。社会的階級が異なればその精神の論理構造もそれとともに異なるから，普遍的に妥当するような論理は存在しない。精神の生み出すものは「イデオロギー」，すなわち思考者自身の社会階級の利己的権益を擬装するための観念の集合以外の何物でもない。したがって，ある学説の正否を改めて検討・分析する必要はない。その論者の依って立つ階級的基礎を暴露すれ

40）前出〔1〕P.891（村田訳）
41）同上〔1〕P.26（村田訳）
42）同上〔1〕同ページ

ば足りる。その論者の属する階級がブルジョアであれば，その説は真理ではなくイデオロギー（マルクス的意味での虚偽）であることになる。[43] 前述したように資本主義社会は階級社会ではないから，このマルクス説は資本主義社会には妥当しないとして一蹴すれば足りるが，ここではマルクスにしたがって資本主義は階級社会であると仮定して，論を進めることにしよう。

ところで真理の使徒を以て任じるマルクスとエンゲルスの階級的出自はどうであったか。この両名ともいわゆるブルジョア階級の子弟である。ミーゼスが以下に指摘するように，[44] マルクスは裕福な弁護士の息子であり，ブルジョア階級の子弟の教育機関と見做されるギムナジュムを経て，労働を体験することもなく大学生としての生活を家族の援助により送り，ドイツの貴族の娘と結婚した。彼の妻の兄はプロシャの内務大臣であり，プロシャ警察の長官であった。彼の世帯はメイドのヘレネ・デムート（Helene Demuth）によって，サービスされた。デムートは結婚もせず，マルクスが住所を変更するたびに彼に従い，その家庭の世話をしたのである。デムートこそは主人たるマルクスに搾取され続けた奴隷のモデルといってよい。

エンゲルスは富裕な製造業者の息子であり，彼自身も製造業者であった。彼は情婦のマリー（Mary）との結婚を拒否した。彼女が無学でその家系が低かったからであるといわれている。マリーの死後エンゲルスは彼女の妹のリッチー（Lizzy）を情婦にした。彼は彼女に「最後の喜びを与えんがために」彼女の死の床で彼女と結婚したという。エンゲルスは猟犬を先にたて乗馬で颯爽と狩を楽しむような，イギリスのゼントリーの遊びを享受したとされる。[45]

ブルジョア階級出身のマルクスとエンゲルスの説は，マルクス説にしたがえば，ブルジョア階級の階級的利益によって汚染された思考の産物であるイデオロギーである，とせねばならないが，そうでないとすれば，彼等は汚染されない純粋の真理を，社会主義社会の到来以前に構想できる世にも稀な天才と見る

43）前出〔6〕P. 125
44）同上〔6〕P. 121
45）同上〔6〕P. 121，エンゲルス関係の記述は〔12〕に依拠している

べきか，さもなくば，独断と偏見と思い上りによって，首尾一貫しない説を臆面もなく吹聴する煽動家と見るべきか，そのいずれかであろう。マルクスはもちろん自分が前者であると考えていたに相違ない。したがって，ある学説や教義の正当性の基準は，マルクスの主張そのもであるから，彼はこれに忠実でない者を，馬鹿者・悪党・邪悪で腐敗したモンスター等と，口を極めて罵倒した。[46)]

ところで，マルクスのドグマによる階級利益とは何か。彼はプロレタリアがその利益を労働組合による労働条件の改善要求を通じて，資本主義体制の枠内で確保しようとする努力や，ブルジョアが資本主義体制の崩壊を防止する目的の為に，搾取を若干抑制しようとする政策に賛同する行為を，ともに歴史の進展を遅らせる空しい試みにすぎないという。マルクスのいう階級利益は，「その発展の足枷（カセ）」からの解放を欲する物質的生産諸力の利益であるというのである。[47)]

これはまことに神秘主義的な説であるが，一体，マルクスをしてかかるイデオロギー説と階級利益説を構想・展開せしめた動機を，どのように理解すべきであろうか。

ミーゼスによれば，マルクスは社会主義の実現に情熱を燃し続けたが，社会主義者の計画に対する経済学者の破壊的な批判に対して，彼は自分が無能力であることを十分に知っていたという。[48)] 1871年にメンガー（Carl Menger）やジェヴォンズ（William Stanley Jevons）の著作が，経済学的研究に新時代を開いた時，マルクスの経済問題に関する著作者としての経歴は，すでに実質的には終っていた。

『資本論』第一巻は1867年に出版されたが，続巻は草稿のみであり，マルクスが限界価値説等の新しい学説の意味を完全に把握していたという証拠はない。マルクスがメンガーやジェヴォンズの学説に対して示した唯一の反応は，『資本論』第二巻以後の出版を延期したことであり，その刊行は彼の死後のこ

46）同上〔６〕P. 131
47）同上〔６〕P. 139
48）同上〔６〕P. 124

とであった。[49)]

ミーゼスによれば，マルクスにイデオロギー理論を発想させたものは，経済学の名声を落としたいという願望であった。マルクス自身の経済学は，リカード理論をとり違えて焼き直した程度のものであったので，自分では反論する能力のない古典学派の後継者たちの，社会主義者の空想的な計画に対する批判的分析を，満腔の憤りを以て中傷し，その名声を傷つけることが絶対的に必要であった。このために企図されたのが，彼のイデオロギー説であるという。[50)]

マルクスによれば，一定の階級に属する人がその階級のイデオロギーに反する意見を主張すれば，彼が労働者階級の構成員であれば裏切者であり，草原の蛇である。裏切者との闘いではすべての手段が許される。[51)] 事実マルクスは言葉の上で裏切者を殺したが，彼の後継者たちは，その正統性を争い反対者を肉体的に抹殺している。なお裏切者がブルジョアであれば，彼は「間抜け」と嘲笑される。

マルクスのイデオロギー説はいうまでもなく，ドグマであって，妨害されない自由な市場経済体制下では，各階層は，階層特有のイデオロギーをもたないから，その衝突もなく，裏切者に対する制裁もない。ただし裏切者に対する血の粛正は，ギャング・暴力団という非合法の世界では，その限りでないのかもしれない。

Ⅴ　社会主義論

マルクスは社会主義の創始者ではなかった。彼が社会主義綱領を採用した時，すでに社会主義の理想は完全につくり上げられていた。彼の社会主義への貢献は，多元論の教説を案出したことと，社会主義の不可避性というドグマを，インスピレーションにより予言したことである。ただしマルクスは，社会主義の

49）前出〔1〕P. 101（村田訳）。なお〔14〕によれば，マルクス著『資本論』第三巻（〔7〕Dritter　Bd. 1894）第五十二章「諸階級」も，わずか一頁余りで途切れている「未完」の断章であって，第三巻も未完成であったとされる

50）前出〔6〕PP. 124-125参照

51）同上〔6〕PP. 130-131参照

到来が必然的であることや，それが最も完全な体制であって，その最終的な実現が，人類にこの世の生活で永遠の至福をもたらすこと等を，何も実証しているわけではない。[52)]

マルクスの洪水のような膨大な著作物においても，「高度な段階の」共産主義社会が生産要素の稀少性に直面しなければならないかもしれない可能性については，いささかも言及していない。共産主義の下では，労働はもはや苦痛ではなくて楽しみ，「生活に最も不可欠なもの」となるであろう，という主張によって，労働の負の効用という事実は隠蔽されている。このような神話の世界では，なすべき選択も，理性で解決すべき仕事も何もない。[53)]

しかし，ひとたび人間の住む現実の世界にたち帰ると，人間行為学が論ずべき問題がある。それは社会主義が果して分業体制として機能できるや否や，ということである。

ミーゼスのいうように，社会主義の概念は，生産要素の市場および生産要素の価格の欠如を暗示している。どのような分業システムの下でも，経済計算なしには行為に課せられた任務を達成できないが，経済計算の可能なのは，市場経済のみだから，生産要素の市場を欠く社会主義では経済計算は不可能である。[54)] ミーゼスは，マルクスが経済計算の問題に思い煩うことを怠ったので，貨幣計算を廃止すればどのような悲惨な結果を招くかに気付かなかった，と判断する。[55)] 社会主義下の経済計算問題[56)]について，筆者は本稿でその詳論と併せ「経済計算論争[57)]」への論及を予定していたが，紙幅の制約上省略せざるをえなかった。こうした諸問題を含め，本稿の不備・欠陥の補正は，これを他日に期す所存である。

52）前出〔1〕PP. 701－703（村田訳）参照
53）同上〔1〕PP. 262－263（村田訳）参照
54）同上〔1〕P. 286（村田訳）参照
55）同上〔1〕P. 291（村田訳）参照
56）その詳細については〔15〕参照
57）〔16〕参照

引用・参照文献

〔1〕Ludwig von Mises: *Human Action. A Treatise on Economics.* 3rd ed., 1966
村田稔雄訳：ヒューマン・アクション。春秋社，1991
〔2〕越後和典：経済学の人間行為学的方法。「彦根論叢」第262・263合併号，1989
〔3〕Karl Marx: *Zur Kritik der Politischen Ökonomie.* 1859
武田隆夫・遠藤湘吉・大内　力・加藤俊彦訳：マルクス経済学批判。岩波文庫第29刷，1983
〔4〕久留間鮫造ほか編集：資本論辞典。縮刷普及版，青木書店，1966
〔5〕Karl Marx: *Misère de la Philosophie. Réponse à la Philosophie de la Misère de M. Proudhon.* 1847
山村　喬訳：哲学の貧困。岩波文庫第２刷，1951
〔6〕Ludwig von Mises: *Theory and History. An Interpretation of Social and Economic Evolution.* 1969
〔7〕Karl Marx: *Das Kapital. Kritik der Politischen Ökonomie*（*Meissner*）. Erster Bd. 1867, Zwiter Bd. 1885, Dritter Bd. 1894
〔8〕Karl Marx-Friedrich Engels: *Das Kommunistische Manifest.* 1848
大内兵衛・向坂逸郎訳：共産党宣言。岩波文庫第56刷，1989
〔9〕L. Mises: *The Ultimate Foundation of Economic Science.* 2nd. ed., 1976
村田稔雄訳：経済科学の根底。日本経済評論社，2002
〔10〕Hans-Hermann Hoppe: *The Economics and Ethics of Private Property.* 1993
〔11〕M.N. Rothberd: *Man, Economy and State*. 1962
吉田靖彦訳：人間，経済及び国家。青山社，上巻2000，下巻2001
〔12〕Gustav Mayer: *Frederick Engels.* 1934
〔13〕Karl Marx: *Lohnarbeit und Kapital.* 1849
長谷部文雄訳：賃労働と資本。岩波文庫第１刷，1927
〔14〕川井修治：マルクス主義階級理論と現代社会。原書房，1986
〔15〕L.Mises: “Die Wirtschaftsrechnung im Sozialistischen Gemeinwesen” *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*. 47(1920)86-121.
F.A. ハイエク編著，迫間眞治郎訳：集産主義計画経済の理論。pp. 100-143，実業之日本社，1950
〔16〕吉田靖彦：社会主義経済計算論争の一考察。宮崎産業経営大学経済学会「経済学論集」第２巻第２号，1994